



羅針盤



大原 國章
Kuniaki Ohara

赤坂虎の門クリニック皮膚科, Visual Dermatology 編集委員長

京都府, 丹後半島, 伊根の舟屋.

「これで決まり！」特集に寄せて

皮膚科を選んだ理由を尋ねられた時に、皆さんはどう答えられますか。人それぞれにいろんな答えがあるでしょうが、目で見て診断できる(らしい)魅力というのが共通項だと思います。血液検査や画像検査なしでも、肉眼で見ただけで(?)分かるのは皮膚科ならではの醍醐味です。

では、視診だけで診断できるメカニズムはどういうものでしょう。教科書を開けば詳細な発疹学が記載されており、その発疹の形状に従って診断を進めるのが王道とされています。しかし、呪文のように発疹学をと覚えても診断がつくとは限らないのが現実です。病理で、所見を逐一記載できたとしても、それで最終診断にたどり着けるわけではないのと同じです。

一目ぱっと見て、その瞬間に診断するには何が必要なのか。その疾患に特異的、特有の所見・症状に気がつくか否か、私はそれが大事だと思っています。数学で必要十分条件という用語があり、この十分条件に当てはめれば、Aという症状さえあればXという診断をするのに十分である。特異度と感度という用語にならえば感度に相当し、Bという症状があればYという疾患の蓋然性が高い。これなら snap diagnosis, Blick Diagnose, 一目診断(瞬目診断)が可能となります。ただし診断的価値のある所見に気がつくか否かには、事前の予備知識が必要で、その疾患を知っていなければなりません。ある意味では職人芸の世界ですが、一目見て分からないものは10分眺めても分からないとも言えます。

さて、一目見て分かるようになるには何が必要でしょうか。これはやはり亀の甲より年の功で、経験に勝るものはありません。実症例を数多く体験して体と頭に浸み込ませるのが大事です。しかし徒弟修業のたたき上げでは時間がかかってしょうがない、何か近道はないのか。ところが、学問に王道なしの諺に反して bypass はあります。図譜を読む、というより見ることです。図譜には先人の知恵と経験が蓄積されていますので、座学で年の功を重ねることが可能なのです。それも1冊だけでなく何冊も何冊もでき

るだけ沢山、読めば読むほど(仮想)経験が豊富になります。1冊の本をくり返し読むという方法もありますが、複数の本を読んで多様な症状を読み取り、その中から共通項(必要条件)を導き出す方がよいと思います。

インターネットで手軽に画像検索ができる時代ですが、手軽であるがゆえに、じっくりと読み込むという点ではどうでしょうか。お金を出して画質の良い紙媒体(本)を買い、熟読するのを勧めます。

ということで、是非この特集号を役立てていただきたいのです。項目立てとしては部位から始めて、分布・配列、拡大所見としてのダーモスコピー、年齢(小児)、個疹、その他の所見としました。(編集部註:本来「個疹」は分布・配列の後に入るパートのはずでしたが、制作の都合上間に合いませんでした。ここにお詫び申し上げます)

そしてこの特集の肝となるのが、キーワードとして抽出してある“決め手”(十分条件)ですが、単独で“一本”もあれば、“有効”、“合わせ技一本”もあります。“決め手”の欄のキーワードはすべて“有効”ですが、“一本”は**赤太字**としておきました。ただし、この価値づけは編集者(大原)の独断に基づいていることをお断りしておきます。

この特集号に合わせて、過去の“似た者同士”^{註1}、“これを見たら何を考える”^{註2}も読んでいただければ鬼に金棒となるでしょう。

ただし、snap diagnosis を習得したとしても、あまりにあっさり診断してしまうと患者さんには有り難味がないようです。ちらっと見ただけで分かるのか、ろくに見てくれなかった、などと文句を言われたことがあります。高性能のパソコンは立ち上がり早いなどと積明するのですが、むしろ、おもむろにダーモスコピーを眺めて、重々しく呟くのが得策かもしれません。

註1: Visual Dermatology 2005年1月号, 2006年1月号, 2007年1月号「似た者同士:目で見える鑑別診断」シリーズ(書籍もあり)

註2: Visual Dermatology 2016年臨時増刊号「これを見たら何を考える? 皮疹のみかたアトラス」特集